

井戸端だより

第42号

発行日：2003.6.27

発行：くらしの学習会

山滴る季節になりました。
井戸端だより第42号をお届けします



— 目次 —

- 6月例会だより ————— 1
- 4月例会だより ————— 3
- 5月例会だより ————— 4
- 「久石青銅之回廊」————— 5
「イサム・ノグチ庭園美術館」
パンフレットより抜粋
- 「イサム・ノグチ庭園美術館」を訪ねて— 6
- 教ができたら鳥が来た！ ——— 8
- ごみ集積場の当番をして ——— 9
- 愛媛新聞記事抜粋 ————— 11





「重信川の自然をはぐくむ会」

—くらしの学習会が参加するかどうかをめぐる—

6月4日、突然私のメールアドレスに、国土交通省松山河川国道事務所の弘田さんからメールが届きました。内容は昨年度愛媛大学を中心にNPO等多くの団体の参加で立ち上げた「重信川の自然をはぐくむ会」に今年度くらしの学習会にも参加してもらい今後の重信川のよりよい自然の方向性についての提案をしてほしいというものでした。またそれにつき、今までのこの会の取り組み等につき出向いて説明したいので、都合を知らせてほしいということで、急遽会員に連絡を取り、6月9日(月)会をもつことになりました。

今年2月にくらしの学習会は、重信町にある砂防出張所を見学しましたが、その時、この弘田さんから重信川のよりよい自然環境を再生する取り組みなどもうかがい、この会のことも、少しは耳にしておりましたが、私たちが重信川との関わり、例えば三か村泉の絵はがきを作って販売したことなど私たちの会の活動の一端をお話したことが縁でこのようなことの運びになったものようでした。

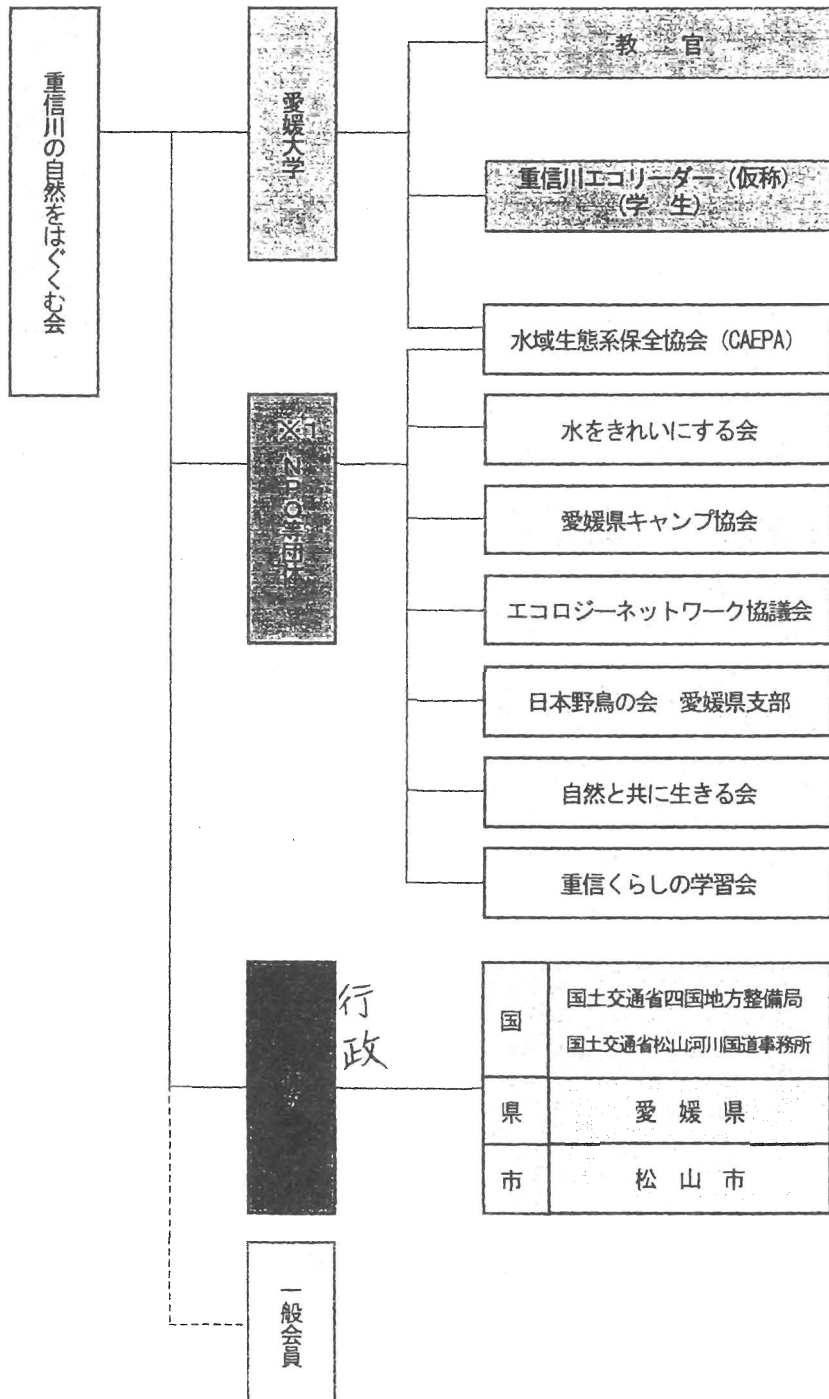
6月9日当日は会員が集まる前に早々と、副所長の前中さんと弘田さんがいらっしゃいました。詳細な資料による説明、夢のある将来構想をうかがっているうちに、お二人の情熱がこちらにも伝わってきて、何か、私たちにできることはないかと前向きに考えるようになりました。ただ、私たちの会は、環境専門でも、重信川専門でもない何でもありの会ですから、どれだけ有効な提案ができるのか、常にメンバーとして誰が関われるのか、等、考えることも多く、この日は、結論を保留にして、14日の例会で決定することとし、散会しました。

6月14日(土)2時から例会を行いました。最大の懸案である、「重信川の自然をはぐくむ会」に、くらしの学習会は、メンバーとして名を連ねることにするのかどうか、みんなで話し合いました。もし参加するとして、一番の問題は、入れ替わり立ち代わり違う人が会に参加するのでは私たちの会としての一体性は保てないし、参加する人によって違う意見を言うのではこの会に対して失礼なので、専属担当者を置くべきであること、誰かそれを引き受けてくれる人がいるのかということ。もしこれがクリアできれば、私たちのこの会への参加は可能になるし、そうなれば色々な情報も入るし、こちら側からの発信もできるいいチャンスになる。話し合いの末、重信川・泉を含む自然環境問題に一番情熱を持っている菊地さんがこの専属担当者を引き受けてくれることになり、くらしの学習会の「重信川の自然をはぐくむ会」への参加が決まりました。今後は、年数回開催されるこの会への参加を通じて、私たちが重信川の自然

環境の再生に関わりを持つことになるでしょう。経過報告は、会報を通じて行っていきたいと思います。

(T・H)

「重信川の自然をはぐくむ会」会員構成 (案)



4月定例会 久万方面へ

4月19日(土)雨を心配しつつ、久万方面へ少し遅ればせの「法蓮寺のしだれ桜」を目的に出かけました。花の見ごろは過ぎていましたが、樹齢180年の桜が、優雅な姿で私たちを迎えてくれました。見頃だと境内いっぱい広げた枝に小さな淡いピンクの花をつけて、それは見事でしょう。寿命が80年～100年といわれる桜だそうで、近年は花付きが悪く老化が目立ってきているそうです。今後どうなるのか心配ですが、新聞に、県林業技術センターでこのほど増殖に成功し、この桜の後継苗が誕生。とありました。5年後には親子が一緒に花を咲かせ、皆の目を楽しませてくれることでしょう。

法蓮寺を後に「道の駅みかわ」へ。道の駅といえば、地域の産物がいっぱい並べられ活気あふれる所と期待していた所は、施設は立派なのですが、店内は薄暗く人もまばらで、気持ちは一気にしぼんでしまい、そそくさと美川を後にしました。

久万方面へ帰りながら、以前、会員の人から久万美術館ではない美術館があるとの話を思い出し、久万高原駅で聞いてみることに。久万カントリークラブの中に「久万青銅の回廊」という美術館があることを教えてもらい、早速、松山方面へ戻ることに。

久万カントリークラブの中へ車を進め着いた所には、あまりにステキな空間が広がっていたのです。門を入りガラス張りの建物の中へ。物静かな女性に迎えられ展示室へ。何気なく、ロダン・ルノアール・ドガの彫刻や、日本を代表する作家・新進気鋭の若手彫刻家の作品が並べられています。ガラス張りの向こうに広がる景色も素晴らしいのです。この頃には雨が激しくなっていました。その雨音までが心地好くとても贅沢な時間がゆっくりと流れ(私たち3人だけの空間だったので)偶然に出会えたこの感動を是非多くの人に味わってもらいたいと思いました。お茶を頂き、豊かな気分で美術館を後にしました。(翌週、家族で訪れ、晴れた空間にも触れてきました。今度は紅葉の頃に・・・)

砥部まで戻り遅めの昼食を取り、近くの「赤坂泉」へ。「三ヶ村泉」のきれいな水と比べると濁っていました。お口直しに「三ヶ村泉」へ。やはり私たちのこだわりの泉は裏切りませんでした。しばらく静寂を味わい、途中、町役場の庭に植えた「ひよんの木」の様子を見て帰ろうと寄り道。枝振りがよく、しっかりと根付いていて安心しつつ、帰路につきました。 A/M

5月17日(土)香川県木田郡牟礼町にある、イサム・ノグチ庭園美術館へ出かけました。ここは、予約をしないと観賞できない所で思い付きにくかったのですが、お世話をしてくれたDさんのおかげで念願が叶いました。ご無沙汰のメンバーと共に4名で高速を走り、2時間半弱で牟礼町へ。

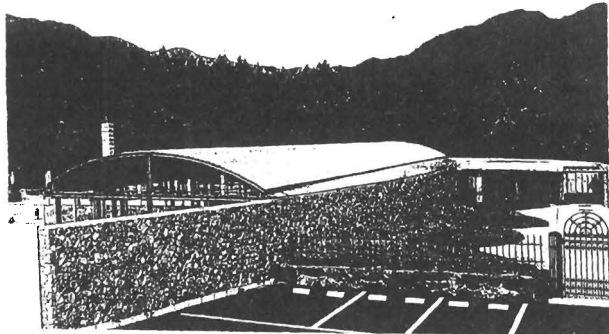
ここは、庵治石の産地で、石の彫刻家イサム・ノグチが1969年から20年余りアトリエと住居を構え作品制作に励んだ場所でした。今だ彼の息遣いが感じられるこの場所を、石庭美術館としてイサム・ノグチ日本財団が彼の遺志を実現し、まもなく5周年を迎え、その間10,000人余りの未来の芸術家・研究者・芸術愛好家が訪れているそうです。

受付を済ませ、案内の人と一緒にまずイサム家へ。江戸時代の豪商屋敷を移築したもので、彼の作品が置かれ、和紙のあかりがやさしさを醸し出して、質素ながらとても贅沢な空間でした。(よく見られる和風の竹と和紙で出来た照明器具は、彼が発案デザインしたもので、オリジナル作品は岐阜にある照明工房のみで作られている)

つづいて彫刻庭園へ。こんもりとした小山があり、真っ正面に屋島を望むこの場所をとてとても気に入っていたそうです。作品の石舞台に寝転がり「お月見」を楽しんだり、エピソードの多いこの庭園には、シークレットポイントが隠されています。

石壁サークル内には、作品作りの道具が置かれた作業蔵・代表作「エナジーヴォイド」「真夜中の太陽」等が収められている展示蔵(この蔵は宇和島の酒蔵を、出来上がった作品群にかぶせる様に組み立てられたそうです。土壁も独自の色合いで、隅々まで彼のこだわりが感じられます)屋外展示の中には、彼が描いたであろうラインが見て取れる未完成の作品があったり、これから取り掛かるつもりでいた石がたくさん置かれています。150点余りの彫刻作品の中で、庵治石の作品は3点だけだそうです。この地をこよなく愛した証しがここには多く残されています。大きな石を作品に仕上げる作業は体力も集中力も並外れたパワーが必要でしょう。80歳をすぎても意欲的に作品作りに挑んだイサム・ノグチのパワーに圧倒され、彼の宇宙観に触れることができ、言葉にならない感動を与えてもらいました。

作品について、あれこれ言える知識はありませんが、本物に触れる事によって感じることに私にとって心の栄養だと思っています。Hさんこの日往復300km以上運転お疲れ様でした。心豊かな一日をありがとうございました。



ご利用のしおり

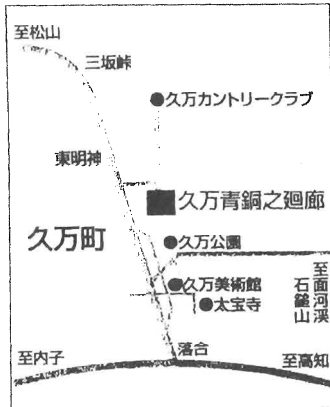
■開館日／開館時間

- 12月・1月・2月・3月 —— 午前10時～午後4時まで
- 4月～11月 —— 午前10時～午後5時まで
- 月曜日・火曜日定休(祝祭日に当る日は開館)
- 年末年始は休館

■入館料

- 一般 —— 500円
- 高大生 —— 300円
- 小中生 —— 200円

いづれともお茶券付
<紅茶、特製クッキー添>



■交通

- <バス>: JR松山駅始発「久万、落出」行きバスがご利用になります。約60分。「中組」下車、徒歩5分。(久万カントリークラブ内)
- <自家用車>: 松山市内から国道33号線で三坂峠経由、約40分

P 有 常時10台駐車可能

久万青銅之廻廊

〒791-1204
愛媛県上浮穴郡久万町東明神乙343-1
(久万カントリークラブ内)
Tel・Fax(0892)21-2221

利用案内

開館日: 火・木・土曜日 / 見学時間: 午前10時、午後1時、3時(1日3回)

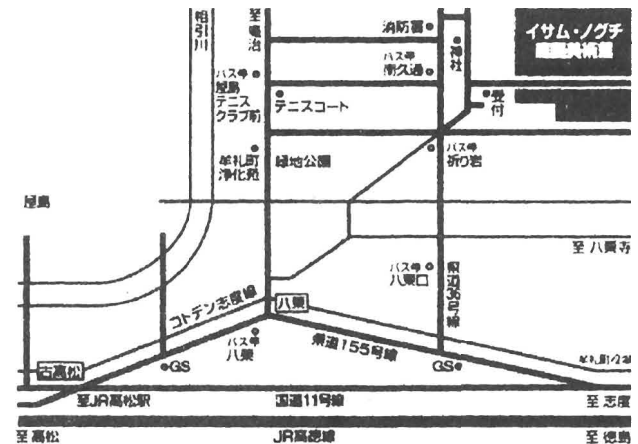
入館方法: 予約制(往復葉書にて日時指定でお申し込み下さい。)

休館日: 月・水・金・日曜日

(夏期 8月12日-17日 / 冬期 12月28日-1月7日 ※年度により変更有り)

入館料: 一般・大学生 2000円 / 高校生 1000円 / 中学生以下 無料

公開施設: アトリエ(石壁サークル内) / 展示蔵 / イサム家周辺 / 彫刻庭園



イサム・ノグチ庭園美術館

〒781-0121 香川県木田郡牟礼町牟礼3519 Tel:087-870-1500 Fax:087-845-0505

交通機関: タクシー 高松空港より(約45分)、JR高松駅より(約25分) バス 高松空港より「連絡特急バス高松行」で高松鍋瀬(約30分)下車、乗り換え 庵治行き「折り返し」(約35分)下車、徒歩5分。 電車 高松鍋瀬より「互町」乗り換え、志度行き「八栗」(約30分)下車、徒歩20分

5

『イサム・ノグチ庭園美術館』を訪ねて

高松市牟礼町にある、『イサム・ノグチ庭園美術館』へ、5月17日（土）からの学習会会員4名で出かけました。

若葉&青葉を眺めながら、各々の思いを大声でおしゃべりする4人を乗せてのドライブは、とても車内だとは思えない程に活気に満ちたものでした。地図上では少し遠隔の地に感じていた目的地でしたが、川内インターから2時間余りで到着しました。

入館予約を取った往復葉書で受付をすませ、待合で待つこと約20分。待合には、イサム・ノグチ氏（以下「氏」という。）がデザインしたコーヒークップやスプーン、和紙を使った卓上スタンドが展示販売されています。また、氏の作品の写真集も数点販売されています。

多分、倉庫に少し手を入れたのだろうと思われる待合には、ヒンヤリとした空気が漂っています。その雰囲気は、我らおしゃべり好き女性陣をも、口数少なにさせるものでした。ここは、前もって氏の作品と静かに向き合う小スペースなのです。

予約時間になり、案内の女性に従って待合から徒歩1分、氏の住居跡「イサム家」に行きました。イサム家は玄関と窓が開け放たれていて、屋外からの見学です。そこは、元、丸亀の豪商の屋敷を移し、屋内空間を大切に残しながら改築されたものです。イサム家の居間には床暖房設備がしてあるそうで、集まった人達が車座で語り合う場所として座り易い様に造られていました。居間の中央には、氏の作品「空間のうねり」が、テーブルの様に置かれています。私には、その作品は、語り合う芸術家達を癒していた存在のように見えました。

イサム家の左横には、「小高い丘」があります。そこは、氏が大好きだった風景を眺める場所です。丘の頂上には、“ここで眠ってもいいですか…？”と言われていたという、氏の魂が込められた大きな楕円形の作品が安置されています。氏は、この地が、未来の芸術家や研究者、そして広く芸術愛好家のためのインスピレーションの源泉になることを強く望んでいました。この丘の上から、氏は、美術館を訪れるそれらの人々にエールを送り続けているのかもしれませんが。

丘を下り、イサム家と向き合う様に造られている「彫刻庭園」は、氏が、この地を公開すると決心した時に作品配置をされたということです。

風雨に晒したくない作品群のために氏は、解体した酒蔵を宇和島から運び入れ、作品群の上から再び組み立てたそうです。

それほどまでに氏が思いを込めた作品の中に、『エナジー・ヴォイド』というタイトルがついた巨大な作品がありました。“エネルギー空間”と直訳できるその作品は、黒色花崗岩で作られていて、その大きさ、その形状、その色と光で、見る者を圧倒します。

ここにある150点余の作品のほとんどは、「無題」のものでした。

氏は、作品を公開するに当たって、見る人が先入観なしに、自分の感じたままを作品達から受け取ってほしいと望んだのです。

氏の作品達には、私が持っていた“石”の概念とはかけ離れた“石”の不思議な魅力がありました。そして、作品として造形されることによって“石”が放つ光や、削り取った部分から現われる色の妙味が、自然の持つ奥深さを示しているようでした。

イサム・ノグチ庭園美術館は、予約制で、週3日・1日3回のみが開館ですが、年間一万人もの人が見学に訪れるそうです。

全体が、一つの「環境作品」と言われるこの美術館…！

皆さんも、是非足を運んでみて下さい。

(R.D.)

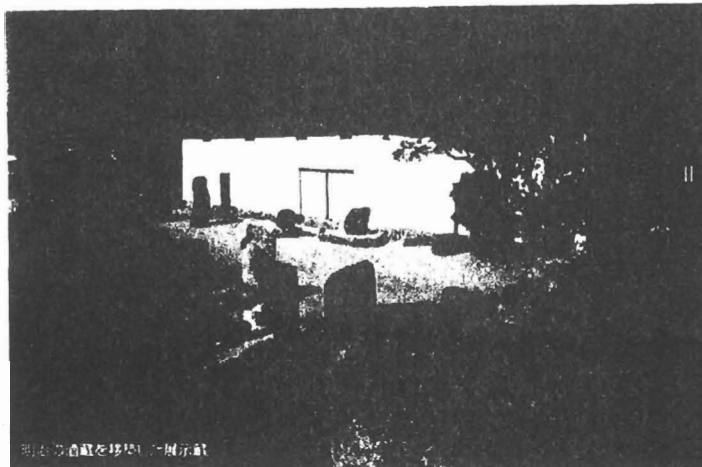




photo © Kishin Shoyama

イサム・ノグチ (Isamu Noguchi)

(1904 ロサンゼルス — 1988 ニューヨーク)

英文学者で詩人の野口米次郎と、作家レオ・ギルモアとの間に生まれ、少年期は日本で育つ。運米して彫刻家を志し、アジア・ヨーロッパを旅して学んだ。パリで彫刻家ブランクーシの助手をつとめる、ニューヨークに居を定め、肖像彫刻、舞台美術をへて環境彫刻やランドスケープ・デザインにまで幅

広い活動を開始。戦後は日本でも彫刻作品や、和紙を使った「あかり」のデザインなどを行う。丹下健三、楳原義一郎、勅使河原蒼風、北大路魯山人、岡本太郎など当時の前衛芸術家達と交流、アメリカ国内外の各地で、彫刻、モニュメント、環境設計を続けた。1983年ニューヨークにイサムノグチ・ガーデン・ミュージアムを開館。主な作品に、広島の平和大橋(1952)、パリのユネスコ本部の庭園(1958)、大阪万博の噴水(1970)、テロイトの「フィリップ・ハート・プラザ」(1979)、東京の毎月会館ロビー「天国」(1977)、カスタメサの彫刻庭園「カリフォルニア・シナリオ」(1982)、フィラデルフィア「ベンジャミン・フランクリンのためのモニュメント(1984)、ヴェネチア・ビエンナーレの滑り台(1986)、高松空港「タイム・アンド・スペース」(1989)、札幌モエレ沼公園(進行中)など。

藪ができれば、鳥が来た！

最近、自宅(集合住宅の1階)の前に野鳥がやってくるようになりました。理由は簡単です。私がドングリやビワの種をまいたり、野鳥たちがクスノキやエノキの種をまいたり(フンに混ぜて落としていってくれたものです)したものが芽を出して、数年間で藪ができたためです。それまでは、前に住んでいた方が畑としてサツマイモを植えたり、園芸種の花を植えたりしていたようですから、1年中ずっと草がはえていたわけではありませんでした。

それに、毎月の草とりのスタイルが変わったことも関係しているかもしれません。集合住宅の同じ階段を利用している家庭の皆で、ちょうど我が家の前にある浄化槽周辺の草とりをしているのですが、ある方が引っ越してきてから、すべての草を根から抜いてしまうのではなく、背の低い草を残し、背の高いの地上部だけを刈り取るか、抜くかするという方法になったのです。つまり、裸の土地から、低い草で覆われた土地になったわけです。

この2つの変化で、野鳥にとっては、食料である草の実や小さな虫がいて、いざというときにさっと隠れる場所のある環境ができあがったことになります。そこで、まずはスズメがたくさん来るようになりました。明け方には特ににぎやかです。部屋の中にいれば野鳥は逃げませんから、声も姿もすぐ近くで楽しめます。どんなおしゃべりをしているのか、じっと観察してみるのですが、やはりよくわかりません。聞き耳がきんがいたら楽しめるのでしょうか。

一番うれしかった訪問者はコジュケイです。大きな声で、「チョットコイ！ チョットコイ！」と鳴く、ウズラより大きくて、普通のニワトリよりも小さなキジ科の鳥です。自宅前の藪でも、それはそれは大きな声で、「チョットコイ！、チョットコイ！」と鳴いていました。

以前、公園整備について、公園に鳥を呼びたいのなら藪をつくらなきゃダメと野鳥に詳しい方に伺いました。その方は、公園で野鳥に会いたいと思っている人が、藪は虫がくるからイヤと言うのだから困ったものだともおっしゃっていました。人と自然との関係をうまく保つことは難しいものですが、なんとか調和のとれた暮らし方を実現したいものです。(T. S)

ごみ集積場の当番をして



5月第4日曜日の午前9時から11時までごみ集積場の当番だった。5人1組で1年に1回程度廻ってくる。ペットボトル、プラスチック類、その他燃やさないごみ、粗大ごみを出す日だった。

半数以上の方が車で運んで来るなか、乳母車に積み持って来るお年寄り、親子連れや男性の姿も多い。決められた場所にそれぞれに分けて積み上げていく。プラスチック類の何と多いことか。きちんと分別の出来ているペットボトル、プラスチック類の資源ごみを見ると、これはまた何らかの形で役に立つと思いき嬉しくなる。大方は正しく分別されているように思えたが、当番をしている私自身もなかなか確信が持てず、何度も「家庭ごみの分別と正しい出し方 ～平成14年7月版～」で確認する。「人のふり（出し方）見て我がふり直せ」・・・で、勉強にもなった。

翌日、環境課に感想を話し疑問点を質しお願いもしてみた。

- ★衣類は、燃やすごみに出せるのは、下着・ワイシャツ程度まで、それ以外はその他燃やさないごみへ。
- ★ペットボトルは、液体の入った PET 1のみ（ふたを外していないものがぼつぼつ見られた）
- ★うどんなどの入っているアルミ容器は、燃やすごみに（その他燃やさないごみにしている人が多く見られた）
- ★プラスチック類のボトル類でふたを外していないものが見られた。
バケツなど硬いプラスチックは、容器包装リサイクル法の対象外なので、その他燃やさないごみへ。
- ◆住民は当番になれば一人住まいのお年寄りでさえも皆真面目にボランティアで役目を果している。新しい分別方法も1年近くになり定着しつつあるが、時には町の担当者が集積場まで出向き、指導したり、意見を聞いたりコミュニケーションを計ってほしいと要望をした。

◆真面目に時間をかけて分別した後は、どこで、どんなにリサイクルされているのか知りたいという声も出ているが、見学会を町が主催してみては？【松山容器（プラスチック圧縮プラント・資源ごみ選別設備・産業廃棄物焼却処理施設） 帝松サービス（ペットボトルリサイクルプラント） 山本製作所（リサイクルプラスチック製品製造） 大野開発（廃棄物処理施設） カネシロ（紙のリサイクル） 日本鋼管など】電話の応対をしてくれた環境課の担当者は、帝松サービスはまだみていないそうだし・・・

大切な地球資源を使い過ぎ、便利さ（文化的な生活）を追求した結果、生態系を破壊してしまい、今度はそれをとり戻すために膨大なお金と、膨大な時間と膨大な労力を要することになった。

先日、地球環境セミナー～美しい地球を子どもたちに～の講演会を聞いた。講師はネットワーク『地球村』代表の高木善之さん（6歳まで横河原に住んでいた）

身近な問題としてごみ問題、ダイオキシン汚染、環境ホルモンの話をされ、日本は世界で最もごみ焼却炉が多いこと、焼却場の排気ガスの規制が甘いという現実、先進国は「安全が立証されていないから規制する」日本は『危険が立証されないから規制しない』という違いがあると指摘された。

今、私たちにできることは、まず事実を知り、できることから始め、人に伝え、意思表示すること。そして、グリーンコンシューマ（環境に配慮した生活をしている人）になろうと熱く語られた。

高木さんの松山講演は20回になり、300名定員の会場は超満員、聴衆は中学生から年配まで男性の参加が多く、いま老若男女誰もが環境に強い関心を抱いていることも実感した。

（S・K）

地名は語る

□5□

愛媛民俗学会長

森 正史さん(81)

温泉郡重信町下林

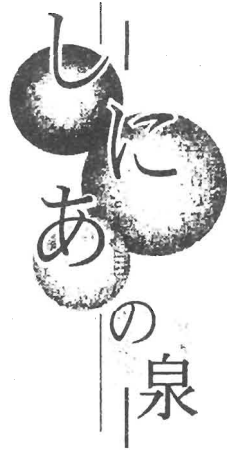


継承のために

新名称に知恵と見識示せ

浮かび上がってくる地名とは本来そういうものだと私は思います。次々に決まってきた新しい自治体名を見ている

意味も何もなくなる恐れが多分にあります。例えば平仮名表記は読みやすいが、音だけの集落と集落の境界には常で一見しても土地の由来や様子は分かりにくい。



森さんは、県内に伝わる習俗、口承、芸能の中に人々の生きる姿を見つめ、県内全域の農山漁村を半世紀にわたり訪ね歩いてきた。「全国公募などによる安易で無難な合併自治体名選びで、地名

に込められてきた風土や歴史を埋没させることにないよう、その地に生活基盤を持つ者が知恵を絞って示す時だ」と訴えている。このままの調子で地名の改変が進むと、次の世代に語り継ぐ

と、現代がなんぼ近代化されたといっても、あまりに過ぎている。その土地に蓄積されてきたものが無視されている。このままの調子で地名の改変が進むと、地域の歴史や風土をそこまで無視しなくて済む。新しい自治体名に将来への夢を描くこともあるでしょう。名前に夢を託す気持ちをはかるし、いじりました。境界が集落連合体を形成する場になった。その考えで一例を挙げれば、重信川は重信町と



川内町の境界であって二町をひっつけてもいる。ただ、合併新市名には現

行の二町名を使わない方針なので、松山藩の重臣・足立重信の治水工事に由来し、道後平野を貫流



民俗学者・柳田国男が森さんにあてた手紙(1958年)の一部。松山から久万経由で土佐へ越えた

近視眼的でない知恵、広域的な視点、歴史の目を持ってほしい。

選定方法ですが、全国公募などしなくていいと思う。合併協だけでは決めかねるだろうから、何かの意見募集は必要で

めかねるだろうから、何かの意見募集は必要で、よその人に頼らず、自分たちの地のことは自



7月例会のご案内
日時：7月19日(土)
3:00 ~
場所：林 宅

くらしの学習会では随時会員を募集しています。

活動会費 2,000円/年 嘱託会費 1,000円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL. FAX 089-964-6956(株)

E-mail: kt-hayashi@nitty.com

